

## 令和2年度第2回東播磨新地域ビジョン検討委員会議事録

1 日 時 令和2年8月18日(火) 13時半～15時

2 場 所 加古川総合庁舎5階 会議室

3 参加者 19名(一般9名 行政10名)

4 内 容

### (1) 想定年次について

委員長) 「想定年次」について

事務局) 前回ご質問のあった想定年次について、「現行ビジョンのような将来を考えるために予想しておく時期、おおむね10～15年後の想定年次については、新ビジョンでは設定せず一世代後の、おおむね30年後の2050年を展望年次として検討を進めていただきたい」検討委員会では、東播磨地域の30年後のなりたい姿である将来像を描き、中長期的な地域づくりの方向性を示していただきたい。

委員長) 30年後をどうやって描くのか。将来のビジョンを描くことが出来るという幸せが我々にあるが、逆にいろいろなことが考えられるということも言える。ここにおられる多くの方々が、地元で活躍される方々でもあるので、「今までの活動をどうするのか」という接続の部分というのは、皆さん疑問があろうかと思う。まずは2050年を展望するイメージ、2050年はこうあるべき、出来れば主体的に「こうありたい」というのを作成し、そこからスタートしないと足下のことだけでは難しい。何故かというと、新型コロナウイルスのこともそうだが、我々予測しているのは過去からの経験を延長したらどうなるか。それだけではやはり難しく、30年後の姿はこうあるべきだ、だったら今から10年間はこうしたいという考え方にする方が良い。

例えば人口予測でも、国勢調査年度によって変動が起きる。実際には、そんなことに一喜一憂するわけではなく、2020年から2050年の姿、こうありたい、こうあるべきだというのをまずは見定めてそこに向かっていく。そのためにこの10年何をするのだろうか、という検討になるのでは。まずは、2050年はこうあるべきだ、こうありたいという将来像とそのためどのようにしていくのかという方向性をまず検討していくといいのでは。その上で、先ほど申し上げたとおり10年間何をしていくかというのが見えてくるのではないか。

外挿法ではなくて、バックキャストイング。あるべき姿を決めて、どうしていくかというやり方についてご意見いただきたい。

委員) そのやり方をするにしても 2040 年ぐらいが限界で、2050 年は雲を掴むような話。バックキャストイング方式についてはおっしゃるとおり。2040 年頃を展望して、20 年から 30 年の間に何をするのかという方が現実的。ただ、全県の方でそうしてくれということであれば仕方ない。考え方としてはそれで良い。

委員長) 全県が 2050 年なのは何か理由があるのか。何故 2040 年じゃないのかという理由はあるのか。

事務局) 2001 年に策定された最初の全県ビジョン。そこから見て、30 年後の 2030 年を展望。それに基づいて、刷新するというので、2020 年の 30 年後の 2050 年と決めた。正式な回答は持ち帰らせていただき後日回答させていただきます。

委員長) まだ共有されていないということになると、難しいことをやれというのが改めてわかったところ。

委員) 30 年後というと次世代、その先のことなので。これまでのデータの積み重ねではない、あるべき姿と言われているが、基本的にデータの積み重ねに基づいて話をする立場からすると非常にそれもまた難しい。自分の子どもや孫がこの地域でどのように過ごしてほしいかという思いからスタートすることになるか。その辺りの思いを、地元に住んでいる方にお伺いするのがスタート地点になるのでは。

委員長) どういう将来像を描くのか、描き方としては地元の方に聞く。自分たちの次の世代がどのように過ごしてほしいかというところから描かないと 2050 年の姿は描きにくいのではないか。

委員) 市町村の総合計画は 10 年先を見る。2030 年がこんな感じになる、それから 2040 年がこうなる、2050 年がこうなると。ある程度のイメージを掴んでおいて、「では、ここはこう変えた方が良いのではないか」「ここもこう変えた方が良いのではないか」というやり方もある。あるいは逆に、「べき論」をたてるかどうか

か。例えば今の東播磨の人口は70万人ぐらい。今日本全体の動きとして、人口は減っているから、東播磨3市2町で2050年は50万人ぐらいになると想定して考えるというやり方もある。50万人ぐらいだと仮定すると、20万人ぐらいが減ることになるから、交通体系はどうなる、地域の土地利用はどうなるのか、あるいは産業はこうしようじゃないかというのが出てくる。それは、バックキャストिंगでやると難しいが、そういうやり方はあるが、「かくあるべき」姿は、なかなか急に言われても出てこないなという感じではある。両方をうまく組み合わせて人口とか産業構造、10年先20年先、2020年をベースに考えて2030年を作ってみる。その結果が少しおかしいなら修正して、2030年をベースに2040年を作ってみる。繰り返して、2050年の姿が出てきた時に、どうかと検証する。ここはこう変えようかとなったときに「かくあるべき姿」と組み合わせることが出来ればどうか。

委員長) 10年ごとのシミュレーションを組み合わせればいいのかという意見。

委員) 今回のビジョンの検討、社会情勢が大きく変わってしまっているということで、特に兵庫県が今回の検討で何を求めているのかお示しいただければありがたい。それからビジョンの検討という性格の中で、3市2町と県のすりあわせが出来る検討であれば、非常に良いものが出来るのではないか。

委員長) 非常に重要な観点。県が何を求めているのか。

事務局) 県が、新しいビジョンに期待される性格としては、住民が共有出来るありがたい姿を「大胆に」描く。思い切った将来像、大胆な発想を持った将来像を描くことが新しいビジョンと私個人は思っている。

委員長) ますますわからなくなってきたが、シミュレーションをしていかなければいけない部分もあり、その上で大胆な絵も描かなければいけない。「描く」というのは絵を描くだけというのではなかなか難しい。学者的な絵だといけないということ。その辺り考えていかないといけない。

委員) 2050年ということになると、私たちはいないであろう。ただそういう

ことになる。学生も含め若い人たちに意見を聞いていかないといけない。若い人たちだけで作るとそれはそれで面白いものになるだろう。そして、今変化が激しい。企業でもそんな長期的なビジョンは立てられない。実際、3年、5年、10年ぐらいで作っているところが多い。それから言えば、臨機応変にビジョンづくりを見直していかないといけない。5年経とうが10年経とうが、やはり変化がある。これだけコロナがあって世の中が1年で大きく変わってしまったということもあるので、こうありたいと思うものを作り上げるのも良いが、時代の変化に合わせて見直していくのも重要。

委員長) 見直しというのは、ある程度想定されたものということでもいいのか？ 30年前、1990年頃を思えば自由化が始まってきた時なので変化の始まりであったように思う。ただ、あのときにこれだけインターネットが発達するとは誰も思わなかった。そう考えると確かに、社会情勢や技術革新によって見直さないといけないものが出てくるのではないか。

事務局) 新ビジョンの見直しについては、まだ何も聞いておりません。

委員長) 当然、見直しは想定されると思う。ほかに作り方でも良いし、作るときの注意事項。シミュレーションやあるべき姿を組み合わせないといけないといったことなどご意見いただきたい。

委員) 前回ビジョンを作った時には想定されていない未来がきっとある。今回の新型コロナウイルスの件も踏まえて、県の提言『ポストコロナ社会に向けて』の中で『社会の絆の再生』という提言もある。コロナに関して絆が大切なキーワードになっている、将来に向けても絆というのは重要になる。そういうことも踏まえて作っていくべき。

委員長) 今後、2050年を展望するにあたり、絆社会というのはキーワードになるのではないか。

委員) 新しいビジョンを検討するにあたって、何を切り口に検討していくかというテーマを様々に定めて、それに沿って検討していくというのも一つの方法

であろう。全県ビジョンでは、2040年を目処に、既に策定されている。2050年というのはなかなか私たちには想像出来ないこと。例えば農業を例に挙げてみると、農業は2050年どうなっているのかを考える時に、今から10年後はどうだろうか、そこから更に10年後はどうだろうかと考えていけば、新たな道筋も見えてくると考える。

委員長) 進め方として、テーマ別にするともう少し見えやすくなってくのではないか。

委員) 30年後というのはやはりなかなか考えにくいことではあるが、大きなテーマとして「安心で安全なまち」というのは10年後も、30年後も、50年後も変わらない。今すぐ5年後10年後ではなく常に持つ目標という形からの進め方。では、そのためにどうしたら良いかというのは5年後、10年後、30年後で変わってくる。私自身も今から30年後だと想像しにくいですが、子どもの成長を考えたときに、今よりも良いまちを残せるように、住みやすいまちを残せるようにと考えながら、進めていけたらいい。

委員長) いろいろと意見をいただき、進め方も精査していかないといけない。変わらない項目もあるというのも確か。今のビジョンも、未来の延長線上にある。今の現行ビジョンを作ったときの地域特性が2050年になっても大きく変わらないと考えれば、自然環境はすぐには変わらないし、地域条件も変わる訳はない、そういう条件で色々と集めて今もあるビジョンのテーマというのは、ある程度踏まえていく。テーマをわける時に一つの基準になるかもしれないし、一つの目標として今後もあり続けるものでないかというところで、出発点としては非常にありがたい、触れやすい方向性。

委員) まさしく私の部署で作ろうとしている第6次長期総合計画についても、SDGsという概念をもとに2030年になりたい姿から、何をしていくのかというのを検討していく。今はコロナで予定が変わっている。やはり行政は10年単位で作っていくというのがあるので、30年先を検討するというのはなかなか難しいと思いながら聞いていた。やはり前提条件、2050年の東播磨の状況はどういう状況か。人口でいったら今70万ちょっと、2050年には60万人ぐらいまで下

がっている、例えば高齢化率は、どんどん上がって 20%から 30%に上がっている、子どもたちの人数も減っている。そういう前提条件をもとに議論をしていかないと、話が広がりすぎて結局收拾がつかなくなるのでは。その分、大胆に前提条件を作れば、そこから、じゃあテーマ別にしましょうか、こういう社会はこうなるのではないかなとかいう方が進めやすいのではと個人的には思う。

委員長) 人口についてはほぼほぼ予測どおり、逆にいうと人口ぐらいしか予測出来ていない。人口予測は一つの鍵。考え方というのは変わるので、例えば我が国が皆婚社会だと呼ばれていたのはわずか 40 年ほど前、1980 年代までそう呼ばれていた。今は違うわけで、勿論社会学によって変わるかもしれないが、人口予測というのは正確に出てくるというところで、人口が 50 万人 60 万人になったらどうなる、どう考えていくかというのは必要でその上で議論をすればいいだろう。

委員) 30 年後というのはやはり難しいかと、将来を考えるにあたって思うのは、古い町並みなどは残していく必要があるだろうし、駅前などでは新しいものがどんどん必要になってくるのではないかと。両方を考えていく必要があるのでは。

委員長) 高砂は駅前など大きな命題を抱えているから。先ほど若い人に質問として、何を残したいか、何を新しくすべきか、あるいはどういったところに住みたいかなど、質問を考えるのも一つの方法かと。

委員) 2050 年ということになると、団塊世代ジュニアが 70 台後半になり、団塊という言葉が使われるのもこれが最後になると思うが、かなり高齢化率も上がっている。どうしても我々市町の行政の立場からすれば、まず人口から考えてしまうが、社人研でみると、稲美町は消滅するところになっているが、県が言っている大胆な施策というものが、果たして現状を維持することが大胆なのか、現状からマイナスを見ても大胆な施策とも言える。今まで我々行政が作っている計画というのは、かなり夢物語、そういう計画が多くあるので、それを作ってしまうと今の人口からみると、不可能な計画になろうかと思うので、その辺の目線を変えたビジョンにしていくこと。

また地域格差というものもかなり出てくるかと、同じ稲美町の中でも市街化区

域であるとか農村地域であるとか。今もうすでに格差というものは出てきているので、そういうところはかなり広がっていく。地域格差をどう埋めていくのか、地域の活力をどう維持していくのか。人の力というものもかなり衰えてくると思うので、現実をみると精一杯頑張っただけで現状維持でもかなり大胆な施策では。少しマイナスなところを受けての大胆な施策とも言えるのではないか。ただ4Gとか5Gとかあり、技術革新というのは我々読みにくいところではあるので、その辺は難しいと思うが、現実を見据えた上での計画にしていくべきではないか。

委員長) 端的に言うと住むところを選んでいく、選択されていく、ということ。例えば土地改正法がこの間の6月に改正されて、いわゆる危険なところに住めなくなる、家のところには特定地域をつけられなくなってくる。今のところ稲美町にはあまり危険なところはないが、住むところ選ばれつつあるという現状があり、その中で住むべき地域が選択されてくるのではないかとということも考えていかないといけない。ある意味試練ではあるが、そういうことも踏まえて、夢物語にならないことが必要。

委員) 話を聞いていて2050年というのはかなり難しい。地方自治体の方でここ最近で総合計画の改訂を進めていくなかで、私もその仕事をしているが、人口ビジョンなども描いてはいるが、人口はどんどんネガティブな方に、尻すぼみになっていくという現状を見ながら夢を入れていくのは難しいところ。行政が作る計画で、夢物語にならないというのも勿論あるが、折角計画を作るのであれば個人的には一つ二つ何か将来に夢を持てるようなものもあれば良いのでは。

委員長) 東播磨というのは都市的地域と農村地域も併せ持ち、実は夢を描ける可能性というのはある。住む選択をするという話、では住まない地域、住めない地域はそのまま良いのか。そこで絵を描いてもいいのか。私は「無税地域」を作ってはどうかと言っている。税金取りませんよと。上下水道もないけど、全部自然循環、太陽エネルギーでやって、昔でいうとヒッピーのようなイメージ、こだわりがある人が住める地域を作っても良いのではないのかと。これもある意味夢物語かもしれないが、そういう大胆なイメージを考えるというのも良いのでは。

突き詰めて言えば、2050年を考えることは難しい。けども、やり方はある

よというのが皆さんのご意見。テーマを少し分けてみてはどうか、変わらないものもある、など。それから、やはりシミュレーションしないといけない、夢物語だけではいけない、この辺りで進めていくということで皆さんよろしいですか。

委員) 夢物語になってしまうので人口のシミュレーションは固めた上でやるしかない。そのやり方が、どちらが良いのか。50年の分厚い一冊の本から書いた方が良いのか、想像しやすい10年後の想定に向けた調査あたりから積み上げていった方がやりやすいかと。

委員) ある程度いくつかの資料を作ってみないか。10年単位で。2030年を作ってみてこれで良いのかと検証してみる。おかしかったら修正してみて、今度は2040年を作り検証し、調整した上で2050年を作る。地域の人口を作ることは、一国全体だったら殆ど移動がないが、地域だと移動があるので難しい。明石は転入が増えている。加古川市は転出超過。それを踏まえてどういう風に今後作るか。加古川市は、今度の総合計画で予想人口を減らすだろう。27万人もならない。

委員長) 人口については資料を以てしないと描くことができない。人口については比較的正しく予測が出来る。上位推計か中位推計か下位推計かというのはあるが、今のところ過去の経験から、下位推計に合わせておけばほぼ正確に予測はされていたので、おそらくそこを踏まえていけば間違いはない。ただ、地域は細くなればなるほど難しいというのも事実。明石市の人口は減らないという予測になっているが、2010年から2015年間の人口予測を踏まえての結果なので、まだわからないことはたくさんある。ある程度基盤となるものとして人口は置いておく。皆さんの意見を踏まえながら作り方というか描き方を事務局の方で取りまとめてお示し出来れば、今日いただいた意見は重要なヒントになった。

## (2) 検証について

委員長) 前回議論が出ていた検証について。現行ビジョンの検証がどうなっているのかわからないと次に進めない。検証について事務局から説明をお願いする。



事務局) 検証(資料1)について説明

委員長) ご質問を承った後、取り組みベースの検証なので、それも踏まえて、各取り組み4つ、「心地いい」・「楽しい」・「美しい」・「力強い」、それらがどう実現出来たかの評価をいただく。

委員) 今の説明を聞いていると、「市民委員に専門性がなかった」という説明があるが、ビジョン自身は県民局も一緒にするもの。その辺りの評価はどうされるのか。委員としては取り組めなくても、県民局の方でチームを作ってやったという項目もいくつかあるように思う。今の説明の仕方というのは、専門性を持つ市民、委員がいなくて出来なかったとなっているが、少し付け加えて、ただ行政の方で出来たところがあればそれも付け加えた方が、より公正な評価。相乗効果とか、役割分担とかどうだったのか。それから地元の自治体との方との連携がうまく出来たのかどうか。市民委員としての活動だけでは、評価としてはどうかと思う。

委員長) 県民局としての意見はどう反映されているのか。例えば、1番のところは防災・防犯活動についての取組だが、防災活動は取り組めたが、防犯についてはノウハウを持つ委員が少なかったとある。では県民局はどうしたの？というところで。難しいとは思いますが、その辺り評価とか調査をされてはどうか。

例えば、右側の指標と比べてみると、うまく出来なかったと言いながら、指標はちゃんと上がっていたりする。うまく出来なかったのに指標は何故上がったのかと考えたりすると、研究の成果かと思う。では、まだ埋められていないということでもよろしいですか？

県の方が、どう活動したか分からない中で評価するというのは難しいと思うが、検証である以上各事業の進捗状況、モニタリングを踏まえて、じゃあ心地いいまちはどこまで出来たのかな、あるいは「美しいまち」はどうだったのかな、とその辺りでご意見を賜りたい。各事業についてはこういう評価で良いと思うが、要するに「心地いいまち」がどこまで実現したのかという評価を考えないといけない。例えば県としては出来ている、7割ぐらい出来ているのではないのか、数値目標がある訳ではないので答えにくいかと思うが。

事務局) 意識調査の結果が出ているが、おおむねどれも意識調査は右肩上がり。若干最終年度で下がったりしているのもあるが。基本は上がっているのも、やはり県民市民町民の方々の意識が上がっているということは、行政なり民間なりの努力によってある程度、「心地いいまち」の暮らしになってきているのではないかと自己評価的になるが思う。例えば防災では、8月に法華山谷川の竣工が出来、一旦被害は受けたがそれに伴ってよりよい河川の改修が出来ているなど、目に見えた形で災害に対する備えは出来つつあるのではと思う。例えば他の地域を見ても、但馬は防災の数値が最近非常に上がっている。平成16年に台風でやられたのが、それを直すために改修に力を入れて、但馬の防災意識、よりよいまちになっているという指標は上がりそれと同じことが東播磨でもいえるのではと。

委員長) 良くなり続けていると。近年落ちているデータもあるので、よく頑張っているけれども、少し最近傾向は下がっているのではないかというご意見などないか。

委員) ビジョン委員として第9期を経験しいろいろ思うところがあるが、評価などで話を聞くと、思いのある方が色んな活動をされるのですが、その人だけが突っ走ってしまって、他の方が着いてこれないとかいろいろな課題があるかと感じるところはあった。第10期では学習会を開催することで、そういうことを改善しながら進めていけるのでは。

東播磨の中心的なイメージとして、ため池があると思うが、ビジョン委員会としては「美しいまち」で、二つのプロジェクトが該当するが、2年ぐらい前から東播磨フィールドステーションも出来ているので、そこの連携がとれていれば。全体的な活動もあるかと思う、「かこむ」との連携も第9期では少なかったように思う、そういうところと連携しながら進めていくことにより、活動が強化されていくのではないか。

委員長) 先ほど「美しいまち」を例に挙げていただいたが、連携の重要性、それと委員の評価の部分にもかかってくるかと思うが、確かにこの文章を読むと、ビジョン委員の活動に対する評価の部分もあるので、それも分けて考えないといけない。他に「美しいまち」について、全体的に指標は上がっている。例えば

心地いいの「住民主体のまちづくりと便利で快適な住みよい暮らし」の指標 8、買い物や通院に便利だと思ふ人の割合が減ってきているといったところで若干課題は残っていると思うが、基本的には、県の行政との関わりもあって「心地いいまち」というのは実現されつつある。ただ利便性などでは課題も一部残っているのではないかということが言われている。個人的には「人と人とのつながりなどは出来てきている」というのは、これから先「住み続けたいまち」になるということに非常に良い傾向なのでは。

委員) 指標としては上がってきているかもしれないが、防災にしても「ノウハウを持つ委員が少なかった」と取り組めていない。その下の、人と人とのつながりのところもそうだが、「専門機関との連携を図ることが困難」。取組 3 の主体的な健康づくりも、「専門的知識を必要とするため」という。これは実際したいことが出来ていないじゃないの、という風を感じられる。専門的な方がいないから出来なかった、専門機関との連携を取ることが難しいというのはこの辺は、どうか。

委員長) ビジョン委員としての取り組みとしての評価と、「心地いいまち」が達成されたかどうかの評価は分けて考えないといけないということで、取り組みとしての評価はまた考えないといけない。その課題というのは、連携がうまくいっていないのか、専門性が足りないのか。専門性については、学習会等身につけていきたいと思いますというところ。「美しいまち」は実現されつつあるが、ビジョン委員の活動としては若干課題があるというご指摘をいただいた。

委員) 評価のところ、コロナの状況等もあって、ビジョン委員がこのことについてどうだったというような振り返りが出来ていない。最終的なまとめもなく終わっている。取り組んだビジョン委員がどのように思ってきたかというのがここには表れていない。事務局の方で考えた分なので、これだけ見たら何も進んでいないなという評価になってしまう。「心地いい」は、行政などそれぞれの取り組みもあり、評価としては良くなっている、子どもも住みやすくなっているとなっている。ビジョン委員としての活動と、それとトータルとして数値的な目標が達成出来た、達成出来ないというのは、それぞれのところでどうだったというビジョン委員が話し合う機会を作らないといけない。

委員長) そういう機会が持てるかどうか、今すぐに何とも言えないところではあるが、おっしゃるとおり。指標としての評価と、ビジョン委員としての評価と。それでは、続いて「楽しいまち」。ビジョン委員としての取り組みのところでも結構ですし、トータルな評価でも結構。取組 6、ビジョン委員としての取組のところはあまり高く評価されていないが、指標そのものは上昇しているところではある。やはり、ビジョン委員としての取組と、トータルは分けて考えないといけない。県の力も勿論あるだろうが、それ以外のところもある。

委員) 「心地いいまち」の指標 8 について。取組 4 の「住んでいる地域は、買い物や通院に便利だと思う人の割合」がずっと下がり続けているというのはかなり由々しき問題。「住民主体で多くの人々の共感を呼ぶ具体的な企画づくりは困難」とあるが、東播磨のように広域的なところでは難しいが、住宅地域ならむしろ、買い物、通院、市民サービス、住民同士の協働互助が出来ているところなので、ここの低さというのはどう見ていけばいいのか。それから今後東播磨で 2040 年、2050 年人口を維持していくとすれば、ここはかなり大事な指標なので、深掘りした方がいい。あるいは広域的なビジョンでは無理だが、それぞれの市町、小地域としての仕掛けを考えていくのか。

委員長) 次のビジョンを考えていくときに重要なポイント。

「楽しいまち」について、基本的に、全部上昇している。特にここは人づくりというところなので、ビジョン委員がかなり頑張ってくれたところ。そういう意味で上昇しているというのはビジョン活動がある程度評価されているのでは。勿論一部は出来ていないところもあるが、しかし基本的にはビジョン委員の活動。例えば「地域づくりの活動を実践する個人・団体が集う場を設け、志を持った者のネットワークを広げていくことは出来た」など、それに合わせるように指標も。最近下がっているのが少し気になるが。

委員) 評価は上がっているが、取組 5 の「若者が希望を持てる社会だと思う人の割合」のところは、22 年よりは上がっているが、R1 では 9.3%。こういうところをどのように考えて行けばいいのか、若者が希望を持てる社会というのは新ビジョンづくりには重要。

委員長) ビジョン委員の方の活躍もあり、人づくりについてはうまくいったように思うが、若者であるとか、住んでいる地域に関心がある人もそうだが、地域と人との関わりについて最近数字が落ちているということが気になる。人と地域の関わりにもう少し注意した方が良いのではないかというご意見。

次は、「美しいまち」。ここは下がり気味のところもある。

委員) 水辺の生態系、野原で生き物観察など、やはり次世代を担う子どもたちに今の環境の実情を知っていただき、なかなかわからないような環境の危機が迫っているということを伝えることにしている。そういう子どもたちを育てることによって、身の回りの環境がどう変わってきているかということに関心を持ってもらうということで、次世代を担う子どもたちを育てていく活動をしているところ。③の持続可能な環境型地域のモデル、④地球と未来にやさしく、低炭素型社会を構築できる、については活動をしていないので、その辺がどう評価されているかはわからない。

委員) 取組 9 と取組 10 に関してはグループが存在したが、取組 11 と取組 12 については、活動するグループが存在しなかった。だから評価でなくて、取り組みにくかった理由になっている。

委員) 取組 11, 12 の活動グループは、ビジョン委員の任期が終わった時に、独立して 3 市 2 町で活躍されている。

委員長) ビジョン委員以外として継続されているということ。

ビジョン委員の活動に継続した形で話を聞いたのですが、他に何か意見ないか。

委員) 取組 10 の指標「自然の生き物とふれあう機会があると思う人の割合」が県内ワースト 1 というのは気になる。活動ではなくて、県民局ごとのアンケート。ビジョンの取組だろうが、県民局の取組だろうが、いずれにしても東播磨の人たちの評価というところで、県内ワースト 1 になっている。後のところにも出てくるが、WITH コロナの時代というのは、外から人が来るというよりは地元の人が地元の自然を見ることであったり、環境学習であったり、その辺を伸ばしていくしかない。そこは次のビジョンを考える上での重点にした方が良い。水辺

もそうだが、見て教えるということが出来ると思うのでその辺の話を深めていく必要があるのでは。

委員) 取組 8 の地域づくりの参加を呼びかけるということですが、これは各市町の高齢者大学、こういうところでの呼びかけに加えて、今いなみの学園の大学院の方で地域活動をしてくださいと呼びかけをしている。そういう活動を更に広めていって、地域の活動を、経験を持った人が参加してくれるそういった仕組みになれば良い。

委員長) いろいろとご意見賜り、ここは課題が多いところ。確かに指標自身も低下しているものもあるし、それから自然環境が、自然豊かな地域が勝ち組になるのではという議論もある中で、折角ある自然をうまく生かし切れていないということも課題ではないか。一方で、人づくりに関しては一生懸命頑張ってきていて、その部分については指標 4 のように、自然環境が守られていると思う人の割合は増えてきている。ただ、やはり全体的に幅広く啓発が出来るような、その辺がまだうまくできていない印象を受ける。あと、地球環境の問題では、資源リサイクルなどの枠組みのもの、Think global な部分は実は活動が停滞していたという話、ここをどうしていくかが課題ではないか。最後、「力強いまち」に関して、何かご意見は。

取組 14 の「担い手の育成・確保に加え、豊かな農林水産資源を守り、地産地消を推進する」この辺り、いかがか。

委員) 今、農協は非常に大変な状況。人手が確保できないというのが一番の問題で、現在大学生にも入ってもらい、どういう解決策があるのかをいろいろと検討しているが、なかなか見つからない状況。国際情勢を見ても、自然環境を見ても非常に、食糧の危機が来るのではないかと。もう一度地産地消を見直すようなプロジェクトが東播磨で必要ではないかと考えている。その辺りも踏まえて今企業で働く方も、出来れば兼業という形で、兼業が認められる世の中になっていくのではないかと思うので、企業で働きながら農業にも参加いただくことを検討していきたい。農業団体の皆さんが県にも話を進めていこうとしている状況。

委員長) 確かに取組 14 の指標を見ると、指標 4、指標 5 いずれも上がって

て、いわばこの地域の農産物がブランド化しつつあるという解釈が出来る。この地域の特徴の一つでもある農業。どちらかというところと中心的な産業もある。

委員) 農業に関しましては、マイナス。昔は農業をやると儲かっていたが、最近では労働に対する対価がどう見てもマイナスになってしまっている。今それをどう打破していくかというところで、ブランド化というところが発信されている。営農組合や法人化された団体がこれから先、農業を担っていくのではないかと。ところで、何故かというところと先ほど兼業の話もあったが実際サラリーマンにしても働く年齢は段々上がっている。65歳、今では70歳ぐらいまで働いておられる。そういう方がその後、農業出来るかと言われると出来ないのではないかと。営農組合という形でそれぞれ助け合いながら農業を担っていく。その中で、ブランド化とか、特産品を作っていくか、儲けていくか。今、営農組合が成り立っているのは、実際モノを売って成り立っているのではなく、やはり行政からの補助金などで成り立っているから、いかにそれをどう支えていくか、個人の農家は将来的に見れば殆ど壊滅になっていくのではないかと。その辺りは加古川市、稲美町では大きな課題になってくる。ビジョン委員会の中で十分検討していく価値はある。

委員長) 組織化が必要なのではということ。またブランド化という話もでた。取組13が工業。企業、ツーリズム。

委員) 検証、評価でいうと、取組13と取組14は取り組みにくかったとなっている。やはり、ビジョン委員という立場がどのように関わればいいかが、非常にわかりにくいと思う。指標や製造品出荷額にしてもそうですが、これにビジョン委員がどう関わっていくのかという。評価や指標とビジョン委員会の活動の乖離、隔たりが大きいのが、少し難しいところだと思う。しかし、何も出来ない訳ではなく、9期で、ものづくりのツアーをするというような取組があった。そういう取組はありえると思う。あまりに具体化してしまうと、想像力がなくなってしまうので、どのようなことなら出来そうかということを示す。枠組みを示すと「こういうことなら出来るかな」とビジョン委員が取り組む活動に繋がりやすいかと思ったので、全体的にビジョン委員の活動としてイメージしやすい分野と、どうしたらいいのという分野が混在していると思うので、その辺りを整理する。距離が遠いなという場合には、ある程度全国レベルでも良いですが、大胆な

取組例というか、あまり誘導してもつまらないが、少し工夫が必要か。

委員長) 経済事情にかかるものは計画的にはいかないというのが、我々の経験でもあるが、そういうところでビジョン委員の工夫だけでは対応出来ない部分もあるのではということ。今後整理しないとイケない。

委員) 取組が 16 あるが、それぞれの取組に対して活動グループが 16 ある訳ではない。たまたま取組に合致するような活動グループがあれば、評価が出来るが、それがわからない。専門性がないから、取り組めなかったという結果になっている。もう一つは、この 16 の取組全てビジョン委員がやるのではなくて、県民局もやる。例えば取組 13 の場合、県民局にもものづくり産業担当がある。その活動がどう反映されているかということも、検証するべきではないか。基本的にビジョン委員会の実践活動グループ、あるいはビジョン委員の中の評価とか取組なので、行政サイドも必要。

もう一点、県民意識調査について。質問事項によっては自分の住んでいるところではなくて、全体の雰囲気でも回答する。回答される方は住んでいる地域のことを考えず日本の今の状態を考えるので適切な質問になっていないのではないかと。質問によっては「自分の住んでいる地域」という言葉をつけてみれば、東播磨に住んでいる人は東播磨のことを考える。そうでなければ兵庫県のことを考えたり、日本のことを考えたり、世界を考えて回答してしまう。

委員長) 「力強い」に関して、ビジョン委員の出来ることはどこなのかということ。作るときにある程度ビジョン委員がやれることと、県がやれることの役割分担を明確にするということが必要。一方で農業について可能性があるのではということが見えてきた。ツーリズムや賑わいについてはまだまだこれから、次のところで今後のビジョンをどうするか考えることが必要。「これが結果です、以上検討終わりです」という訳にはいかないで皆さんの意見を伺って次のステップに移りたい。

委員) 4 つに分かれて活動をしているが、枠を超えて連携しないと出来ないようなこと、例えば農業の問題。「楽しい」と「心地いい」もそうだが、連携してやらないとイケないということがある。きっちり 4 つに分かれているというよ



りは相互に関連していることが多い。関連しているけど、その枠をなかなか超えられていない。グループはそれぞれで活動している。それらの枠を超えて実現するというようなことが出来る組織、ビジョンにしていけないといけない。

委員長) 今後のビジョン委員会の進め方という意味で。  
つぎに、事務局より「予測データからみる 2050 年の東播磨について」資料説明をお願いします。

事務局) 資料説明

委員長) 資料 8 の各市町住民意識調査について、各市町より説明。

委員) 明石市ではまちづくり市民意識調査を昨年実施したが、目的としては長期総合計画の総合戦略の政策展開でのサンプル。検証し、今後のまちづくり推進に役立てていく。18 歳以上の市民 5000 人を対象としている。今回変えたところは、5000 人のうち 2000 人は過去 5 年以内に転入されてきた方を抽出。実際の回収率は 65.3%。前回 52.8%だったので 10%程上がっている。過去 5 年以内でいうと、20 代と 30 代の子育て世代が多く転入してきている。各分野で良くなったところは全世代、転入してきた方から子育て環境が充実しているという評価をいただいている。良好な都市環境、交通などもあわせて高い評価をいただいている。今後推進すべき分野として全世代としては高齢者対策の充実。5 年以内転入者については子育て環境の更なる充実。2、3、4 については、交通体系の構築、地域医療の充実、防災等生活安全対策の推進とこれはほぼ同じ順位。次点では全市民の方では、就労対象者への支援ということで働くところが少ないというご指摘。5 年以内転入の方については、子どもが多いので学校教育の充実という結果。転入者の状況として、転入する際の決め手になったところとして、第 1 位が電車やバス、交通利便性の高いところ。明石市は交通利便性が高いというところで選ばれていた。もう少し高いかと思っていたが、子育て施策の充実が第 5 位となっている。生活利便性、子育て施策の充実が評価されているということが今回の調査でわかった。

委員) 令和 2 年 2 月に現在策定中の総合計画の骨子案の基礎資料とするため、

高砂市民未来意識調査を実施した。P8、10年後になってほしい高砂市の姿では「日常の買い物が近くで出来る」が41.9%と最も高い。2位の「子どもたちが増え、元気に育っている」というのは年齢性別を問わず高い結果となった。「魅力ある行ってみたい公園、公共施設がある」というのは若い世代で多くの回答があった。P9、出生数が増えるために、力を入れるべきことでは「親の経済的負担を少なくする」が最も高い。女性の回答では「子育てしながら働きやすい職場を増やす」が1位になっていた。P14、どんなまちに住みたいか、という質問では「近くで買い物ができる」が最も高かった。「犯罪・事故がない」「災害に強い」ということも望まれている。若い世代や女性は「犯罪・事故が少ないまち」を望む傾向があった。P18、高砂のにぎわいの中心として、力を入れるべき場所では、約半数近くが山電高砂駅周辺と回答していた。若い世代はアスパ高砂周辺を望まれている。P10、義務教育で力を入れるべきことについては「先生の人材確保、育成、協力」が1位、次いで「子どもの学力の向上」「いじめ・困りごとへの対応」となっている。P20、誰もが活躍し、参加しやすい社会については「助け合い、思いやりのある人が増えていること」が一番高い。その次の「若い人が希望を持ち、自己実現できること」というのはどの世代でも男女を問わず支持されている。P21、市民活動については、肯定的な気持ちの方が全体の6割を超えていた。市民活動を始めるために必要なことでは「活動する人が、一緒に使える場所、資材があること」が最も高く、「団体・市民主催のイベント開催に対する助成」が2番目、「活動を支援する団体があること」が3番目にきている。活動したい人どうしの繋がりが重視されているように感じる。

委員) 播磨町では昨年度と今年度に播磨町総合計画を策定していて、意識調査を行っている。対象、回収率については記載のとおり。今後目指していく播磨町の姿について、前回10年前も同様の調査をしているが、当時は「活力・賑わい」が最も高かったが、今回については「安心・安全」が一番高い項目だった。住民の意識が安全・安心に向かっているということがわかった。

委員長) 本日の資料については、持ち帰り、次回、資料をもって、本日話題にのぼった2050年の人口等も踏まえて議論が出来れば。